

住民と行政が一緒にまちづくり

うま くに 美しく国へ

「美しく国づくり協会」会員による対談・鼎談シリーズ「美しく国へ」。2回目は、サステイナブル・コミュニティ研究所所長の川村健一氏と県立広島大学大学院教授の百武ひろ子氏に語り合ってもらった。

「美しく国づくり」対談・鼎談シリーズ

〈2〉

川村 健一氏



(かわむら・けんいち) 1973年京都大学工学部卒。同年フジタ工業(現フジタ)に勤務、土木設計コンサルタント部、技術開発部を経て、87年から技術アタッチメントとして米国駐在。91年フジタリサーチ部設立。95年から同社社長、09年本社エンジニアリング本部副部長を経て、02年フジタ退社。NPO法人サステイナブル・コミュニティ研究所所長。広島経済大学客員教授、米国TWINSON社取締役、他、非常勤取締役7社。ロボティクス、環境、マルチメディア、新素材と多岐の分野の研究開発にかかわる。NPO法人「美しく国づくり協会」理事。

百武 ひろ子氏



(ひやくたけ・ひろこ) 1992年早稲田大学大学院理工学研究科修了後、同年野村総合研究所研究員、97年ハーバード大デザイン大学院都市デザインコース入学、02年東京工業大学大学院社会工学研究科価値システム専攻。県立広島大学大学院経営管理研究科教授。主に社会人を対象に合意形成教育についての研究を進めてきたが、現在は学校教育における合意形成教育に重心を置いた研究も。さらに、地域課題の発見・解決を実践する主体として市民を中心とした多様なステークホルダーによる地域コミュニティの育成を促進する公共空間の在り方を感性的価値に着目して研究。NPO法人「美しく国づくり協会」理事。

司会 広島で「美しく国づくり」であるには「美しく国づくり」が浮かびますか。

広島から直接世界へ

川村 「美しく国づくり」の中には、まちの在り方も大事ですが、暮らし方をサポートするリソースがどれだけあるか、かつさまざまな人が集まれるかが大事です。広島には海と山と両方があり、農業、漁業、畜産、木材、ましてやお酒もある。つくるとそれを供する人と、それをベラスにした産業の流れがあります。いわば一つの日本の経済圏で「広島から直接世界へ」であることです。

また、震災復興。原爆からのリコンストラクションするプロセスの中で、さまざまな被害を受けた人がいることを受けながらまちづくりをする。そういうものを考えるキーワードに「美しく国づくり」があります。



平和大通り (写真提供: 広島市広報課)

感性的価値を話し合う

百武 私は景観計画などに最初に取り組んだことで、大学院を出て野村総研に入ったときも、景観条例の作成に参加したりしました。その時に、この景観が良い景観だとか悪い景観だというのは「誰が決めるのか」というのが私の中心になって

百武 ただ景観がきれいとか美しいというだけではなく、そこに「美しく国づくり」が必要ではないかと思っ

ています。「美しく国づくり」の語源を調べると、甘んじておいておいて言うので「美しく国づくり」にたどり着いたんですね。ですから成熟したいいものも入っているかな。そういう目で見ると広島には、そうしたところ結構たくさんあります。生産現場を見ながら食べられる場所、例えばレモンの畑、レモンがなっているところを見て、カキにレモンをかけて食べるとか、そういうせいたくもこれから求められる、もっとフォカカスされて広島の良いが内外の人に知られていくのではないかなと思います。

あと、震災復興のことですが、平和大通りは広島市の景観の核となっていると思うのですが、皆が厭んとして、世界中の人から木を寄付してもらって大通りができた。それが都市の軸となっている。それは自

分たちでいって来た、関わって育ててきたランドスケープだと思います。川村 広島の中でまちづくりの一番最初のキーワードは「祈る平和」だったのですね。戦争を受けた人たちが、自らの被害状況を話し合ったわけですね。世が変わって、「祈る平和」になり、「1000歩道」もその一つです。その流れは今も続いています。

百武 震災復興の時、都市全体としての軸をどうするか、1000歩道もいろいろな都市で構想されたのですが、実現したのは広島と札幌、名古屋だけです。「創る平和」というと、平和は皆でつくっていくものでしたら、価値観が多様化している人たちがどのように平和をつくるかという合意形成に役に立つのではないかな、というのが広島に来た大きな理由です。

川村 日本人の発想というのは、最初に100%のいいものができなくちゃいけないんです。私がアメリカで経験した宇宙衛星事業などでは、ミッションを出すときに100%なんてあり得ないんです。6割くらい出すのがエンジニアリングで、未完成だけど失敗を採りながらそれをバリエーションで成長させていくという発想です。

司会 最近よく言われているサステイナブル的発想ですね。川村さんが「サステイナブル・コミュニティ研究所」をつくられたのは、二十数年前ですが、「サステイナブル」は理解されましたか。

技術のゴールは暮らし

川村 言葉自身がなかった時代です。ですから1995年に「サステイナブル

電柱が嫌いとか、「じゃや、じゃや」しているのは駄目とか言われるが、本当に住んでいる人は、そういう風景を望んでいるのか。実はそのプロセスがすごく大事なのではないかと、ということから「合意形成」という世界に入ったのです。そこに住んでいる人が大事にしたい、守りたい、このようにつくってほしいという景観は、はたから見るとはな

そこに住んでいる人、専門家の考えるとはちよと違つてもいいかな、良い悪いではなく、好き嫌いという感情の中に感性的な価値を話し合えることが、どうやって作るのだから、というところは、大きなテーマになっているのです。自分が建築を学んでいる時はパールの終わり方だったのですが、海外からもいろいろな人が来て、すごい奇妙さで、白がすごいのか。建築というのは、1年、2年で変わる広告みたいなものではないのに、それでいいのかということをはっきり疑問に思っていて、どのように社会がそういうデザインを生み出しているのか。セネコンに入ったり、有名建築家のアトリエ事務所に入ったりするのが普通の仕事ですが、野村総研に入ると考えようと思ったのです。

できるまでのプロセスに昔から興味があつて、今でもそこに興味があります。こういうものを表現したいというのは、そこに住んでいる人が感じていることで、それに建築の専門家として応えるのが建築家のクリエイティブリティーだと思つています。

川村 ニューオーリンズが水没したとき、まず「堤防をつくって、インフラを整備」してというスタートだったのが、「まちの中で暮らしていた人たちが戻ってきた」というためには「いろいろなまちにしたい」という思い、意見をききながら場所をワークショップをして、絵に

・コミュニティ」の初版を発行したので、出版社は「やめてください、何ですか、これは、横文字だ」と。「いや、この言葉はそのうち出るから分かる。絶対これでない」と駄目だ」と、一悶着のこともあったのですが、発行することができました。

共有財産生まれる

百武 そつなんです。私は環境とばかり思い込んでいたので、すごくギャップとかが、多様性があった、いろいろな軸の中で何をサステイナブルなものにしていくかという自体も皆で考えていく必要がある、要素があるのだ、もしかしたら人間関係とか信頼性とか、文化とか、それを持ち寄って話し合えることが、本当の意味でサステイナブルにした方がいいか関係してくると思います。

川村 1999年にアパスト会議があつて「21世紀はどのような時代」になるだろうかというところを考えた中で、サステイナブルな社会をつくらなければならぬというところを伝え始めたのです。技術は突然パッとテラブルの上で生まれて、それで幸せになるものではなく、その技術をその村なり、まちの暮らしの中に溶け込ませて使いついで、知恵としてその町の中に出てくるもの。だから、21世紀は地域の時代になるし、地域の中でどういろいろな知識を自分たちの流れに溶け込ませて、文化として生かしていくものだ。とどこににおいて社会技術はとても大事になっていく。

その流れの中で、温暖化社会に対応するために社会技術の研究開発が進められ、それが今のSDGs(持続可能な開発目標)の源流となっている。その活動を通して住民のコミュニティ、みんなの共有財産が生まれ育ってきたのです。

百武 私は1990年代後半にアメリカに留学したのですが、サステイナブルについて結構話したことを思い出しました。今でも日本ではサステイナブルという環境面で持続的なことを思つた人が多いのですが、アメリカに「サステイナブル」とそのまま言うって、あの当時は経済的サステイナブルだと言った瞬間的に反応したのです。

するプロセスをつくって、共有しながら合意形成を進めたのです。マスタープランをグループに分けて皆でつくっていく。これはアメリカの中でコミュニティのつくり方の原点になっている。まちができた時に、そこに人が戻って、住みながら、つくり替えていく中で暮らし方とか、新しい価値が出てくる。

公共施設を育てる

百武 今の公民館とかコミュニティセンターにすごく関心があるのです。どこも同じで、面白くないじゃないですか。いろいろな話し合いがあったり、インキュベーションセンター的な新しい産業が生まれたりする場にすべきだと思つています。そのためには地域の文化と一緒に考えることが、話しかけることがまちづくりの第一歩になるのではないかと思っています。例えば海外から人が来たときに、このまちの人とはどんな人たちのだろう、実際に話してみたいと思つたことがあると思うのです。そのときにコミュニティセンターに行ったら一緒にご飯を食べられるとか、じかに地域の人と会える観光名所となるような施設ができたらいかなと思つています。

川村 日本は、つくった後、メンテナンスにほとんど予算が出ないけれども、

川村 全くそのとおり。独立した地域経済圏を確立するというのがサステイナブルの原点だったのです。

百武 そつなんです。私は環境とばかり思い込んでいたので、すごくギャップとかが、多様性があった、いろいろな軸の中で何をサステイナブルなものにしていくかという自体も皆で考えていく必要がある、要素があるのだ、もしかしたら人間関係とか信頼性とか、文化とか、それを持ち寄って話し合えることが、本当の意味でサステイナブルにした方がいいか関係してくると思います。

川村 1999年にアパスト会議があつて「21世紀はどのような時代」になるだろうかというところを考えた中で、サステイナブルな社会をつくらなければならぬというところを伝え始めたのです。技術は突然パッとテラブルの上で生まれて、それで幸せになるものではなく、その技術をその村なり、まちの暮らしの中に溶け込ませて使いついで、知恵としてその町の中に出てくるもの。だから、21世紀は地域の時代になるし、地域の中でどういろいろな知識を自分たちの流れに溶け込ませて、文化として生かしていくものだ。とどこににおいて社会技術はとても大事になっていく。

その流れの中で、温暖化社会に対応するために社会技術の研究開発が進められ、それが今のSDGs(持続可能な開発目標)の源流となっている。その活動を通して住民のコミュニティ、みんなの共有財産が生まれ育ってきたのです。

百武 私は1990年代後半にアメリカに留学したのですが、サステイナブルについて結構話したことを思い出しました。今でも日本ではサステイナブルという環境面で持続的なことを思つた人が多いのですが、アメリカに「サステイナブル」とそのまま言うって、あの当時は経済的サステイナブルだと言った瞬間的に反応したのです。

するプロセスをつくって、共有しながら合意形成を進めたのです。マスタープランをグループに分けて皆でつくっていく。これはアメリカの中でコミュニティのつくり方の原点になっている。まちができた時に、そこに人が戻って、住みながら、つくり替えていく中で暮らし方とか、新しい価値が出てくる。

百武 今の公民館とかコミュニティセンターにすごく関心があるのです。どこも同じで、面白くないじゃないですか。いろいろな話し合いがあったり、インキュベーションセンター的な新しい産業が生まれたりする場にすべきだと思つています。そのためには地域の文化と一緒に考えることが、話しかけることがまちづくりの第一歩になるのではないかと思っています。例えば海外から人が来たときに、このまちの人とはどんな人たちのだろう、実際に話してみたいと思つたことがあると思うのです。そのときにコミュニティセンターに行ったら一緒にご飯を食べられるとか、じかに地域の人と会える観光名所となるような施設ができたらいかなと思つています。

川村 日本は、つくった後、メンテナンスにほとんど予算が出ないけれども、